京都・東福寺常楽庵庫裏

1 所在地　京都市東山区本町一五丁目

2 調査期間　二〇〇二年（平14）九月～二〇〇三年一二月

3 発掘機関　㈶京都伝統建築技術協会（半解体修理）

4 調査担当者　斉藤尚明・村口寿仁

5 遺跡の種類　寺院跡

6 遺跡の年代　文政二年（一八一九）以前

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は、臨済宗東福寺派の本山内にあって、東福寺開山を祀る塔院の一施設である庫裏で、二〇〇二年九月から半解体修理を行なっていた。木簡は現建物（文政七年再建）のほぼ中央付近にある副司寮と称する部屋の西北隅付近から出土した。木簡が出土した遺構は、上穴が直径四〇〇㎜深さ三〇〇㎜、下穴が直径六〇㎜深さ四五〇㎜の埋設穴である。遺物は現施設のものではなく、天明年間（一七八一～八九）から文政二年（一八一九）の間に再建されたと推察する旧庫裏の土間部に、鎮壇具として埋設されたものであろう。直径四五㎜の球形の鉄塊が共伴した。

（京都東南部）

8 木簡の釈文・内容

(1)
・「龍王□〔仂カ〕」
・「宅西方□〔大カ〕」
・「伽収汝□〔百カ〕」
・「婆□」
・「□」
・「□」
・「若□〔有カ〕」
・「二足□」

(45)×39×39　065＊

頭を尖形にした八角柱である。八角各面の幅は一五㎜。下方は腐朽のため全長は不明。材種は散孔材で、朴と思われる。各面の墨書は、『孔雀王呪経』の経文中に見られる字句である。

9 関係文献

㈶京都伝統建築技術協会編、㈜東福寺発行『重要文化財東福寺常楽庵庫裏修理工事報告書』（二〇〇四年）

（川嶋一雄）